

作男・ゴーの名誉

THE HONOUR OF ISRAEL GOW

チェスタートン Chesterton

青空文庫

嵐吹く銀緑色の夕方、灰色のスコッチ縞の着衣につつまれた師父しふブラウンは、灰色のスコットランドのある谷間の涯はてに來た、そして奇妙なグレンジル城を仰ぎ見た。城はその窪地の一方の端を袋町のように塞いでいた、それがまた世界の涯のように見えた。嶮けわしい屋根や海緑色の石盤せきばん瓦茸かわらぶき小塔の聳え具合が仏蘭西フランス蘇格蘭スコットランド折衷せつちゆう式しきの城の様式なもので、城は師父ブラウンのような英蘭人イングランドにはお伽話とぎばなしに出て來る魔女のかぶる陰險な尖り帽を思い出させるのであつた。そして周圍にゆらいでいる松林は小塔の緑色りよくしよくと對比して無数の渡鳥わたりどりの群のように黒く見えた。こうした人を夢幻の世界か、または睡ねむたげな魔界のような雰囲氣の中に惹込むのは、ただこの景物ばかりがさせる技ではなかつた、なぜならば、スコットランドの貴族の家柄に、人間並をはるかに越して濃厚に纏綿てんめんしているところの高慢と狂氣と不思議な悲哀との雲がここにも絡みついていてからであつた。スコットランドは遺伝という毒藥を二服持っている、貴族という血の意識とカルヴェイン教徒の因襲の意識とがそれだ。

坊さんはグラスゴーまで用事があつて来たので、今一日を割いて、友人なる素人探偵フランボーに会いにやつて来たのであつた。フランボーは最近伝えられたグレンジル伯の死説の真偽を確かめるために今一人警察の本職探偵と倫敦ロンドンからやつて来てこのグレンジル城に滞在していた。疑問の人物グレンジル伯は十六世紀の昔、国内の心根こころねの曲つた貴族の間においても、剛勇と乱心とだけだけしい奸智とで彼等を縮み上あがらせた種族の最後の代表者ともいふべき男であつた。

幾世紀にわたつてグレンジル城の城主は莫迦ぼかの限りをつくした、今ではもう莫迦も種ぎれになつたろうと思われても決して無理はないのであつた。ところが事實は今の最後の伯爵は、まだ誰も手をつけたことのない珍趣向で、伝家のしきたりを完成させた、すなわち彼は姿をくらましたのだ。といつても彼が外国へでも行つたという意味ではない。どう考えても彼はまだ城内に生きているはずである。もし彼がどこかに居いるものとすれば、事實彼の名は教会名簿にも大冊の赤い華族名鑑にもまだ載っているのだ、だが誰にも彼れを太陽の下に見たと云うものがないのだ。もしも何人なんびとか彼を見た者があるとすれば、それは馬丁ばていとも次男ともつかない孤独の召使の男である。彼はひどい聾つんぼなので、早合点はやがてんの人は彼を唾者おしだと思ひ込み、それより落付いた人も彼を薄鈍物うすのろだといった。瘦せてガラガラし

た、赤毛の働き男で、頸くびはいかにも頑固だが魚のような眼をもった彼はイズレールゴーという名で通っている。そしてこの物佻やかたしい館やかたにつかえる一個の無言の召使である。けれども彼が馬鈴薯ばれいしょを掘る絶倫な精力と判で押ししたように規則正しく台所へ消えて行くことは見る人に、彼が誰か高位の人のために食事の用意でもしているんじゃないか、そうとすれば不思議な伯爵はやはり城内にかくれているのではないかという印象を起させるのであった。そこで世人せいじんが突込んで実際は伯爵が生きているんじゃないかと訊くとゴーは頑固に首をふつてそんなはずはないという。ある朝市長と牧師が城に呼ばれた。そこで両人の者はその作さく男おとこ兼馬丁兼厨夫ちゆうふがたくさんの兼職の中へ今一つ葬儀屋の職を加えて、やんごとない主人を棺ひつぎの中に釘づけにしておいたという事実を発見した。この奇妙な事実がその後どの程度まで取調べられたものか、またはまるで取調べられなかったものか今以てよくは解っていないようだ。何しろフランボーが二、三日前に倫敦ロンドンから北行ほくこうして来るまでというもの正式の取調べはまだ行われてなかったくらいだから、行われぬままにしかし、グレンジル伯の遺骸は（それが遺骸だとすれば）小岳しょうきゆうの小さな墓地に今日まで葬られ
 であるわけだ。師父ブラウンが仄暗ほのくらい樹苑じゆえんを通つて城影じょうえいの下に来た時、空には厚あ雲つぐもがかぶさり、大気は湿つぽく雷鳴が催していた。緑ばんだ金色の夕映ゆうばえの名残を背景

にして黒い人間の姿が影絵のように立っているのを彼は見た。妙な絹帽をかぶった男で肩に大きな鋤を担いでいる。その取合せが妙にかの寺男を思わせた。師父ブラウンはその聾の下男が馬鈴薯を掘るといふ事をふと思ひ出して、さてはその訳がと合点したのであつた。彼はこの蘇格蘭の百姓がどうやら解けたと思つた。官憲の臨検に対する故意から黒帽をかぶらなければならんと考えたのであろう。心持も読める、——

そうかと言つてそのため馬鈴薯掘りは一時間たりとも休もうとはしない儉約心も解つた。坊さんが通りかかると吃驚して迂散臭そうな眼付をしたのもこうした型の人間に特有な油断のない周当さを裏書するものである。正面の大戸がフランボー自身によつて開かれた。側には鉄灰色の頭髮をした瘦せぎすな男が、紙片を手にして立っていた。

ロンドン
倫敦警視庁のクレーヴン警部だ。玄関の間は裝飾の大部分が剥がれてガランとしていた。がこの家の陰險な先祖の仮髪をかぶつた蒼白いフンというような顔が一つ二つ古色蒼然たる画布の中から見下していた。二人について奥の間へはいつて行くと、ブラウンは二人が長い柏材の卓子に席をしめていた事をした。テーブルの一方の端には走書

のしてある紙片がひろがつており、そして側にはウイスキー瓶と葉巻とが載っている。その他の部屋には所々バラバラに物品が列べられてある。正体の何と云つて説明のつかない

い品ばかりである。あるものはキラキラ光る碎れ硝子の寄集めのようである。あるものは褐色の塵芥じんあいの山のように見える。あるものはつまらぬ棒切れのように見えた。

「ホウまるで地質学展覧会を開業している様じやなあ」とブラウンは腰を下しながら、褐色の塵芥や硝子の破片の方へ頭をちよつと突出していった。

「いや地質学展覧会ではない」とフランボーが答えた。「心理学展覧会と言つていただき
たい」

「ああ、後生ですから来られる早々無駄言ばかりは御免下さい」と警察探偵は笑いながら云つた。

「まあ聞きたまえ、吾々われわれは今グレンジル卿についてある事件を発見するところです。卿は狂人であつたのです」

高い帽子をいただき鋤を担いだゴアの黒い影法師が暮れ行く空に朧げな外線を劃かくしながら窓硝子を過ぎて行つた。師父ブラウンは熱心にそれを見送つていたがやがてフランボーに答えて云つた。

「なるほど伯爵については妙な点があるに相違ないとわしは思っている。でなくば自分を生理めにさせるわけはなくまた事実死んだとしたらあんなに慌てて葬らせようとしなくと

もよいはずじゃ。しかし君、狂人とはいかなる点を以て云うのじやな」

「さあそこですが」とフランボーが云った。「このクレーヴン君が家の中で蒐集した物件の品名目録を今読上げてもらうから聞いて下さい」

「しかし蠟燭ろうそくがなくてはどうもならんなア」とクレーヴンが不意に言った、「どうやら暴模様あれもようになって来たようだし、これでは暗くて読めん」

「時にあなたがたの蒐集中に蠟燭らしいものがあつたかな？」ブラウンが笑いながら云った。

フランボーは鹿爪しかつめらしい顔をもたげた。そして黒い眼をこの友人の上にジツと据えた。

「それがまた妙なんですね、蠟燭は二十五本もありながら燭台は影も形も見えんです」

急に室内は暗くなつて来た、風は急に吹荒ふきすざんで来た。ブラウンは卓子テーブルに添うて蠟燭

の束が他のゴミゴミした蒐集品の中に転がっているところへ来た。がふとその時彼は赤茶色の芥あくたの山のようなものを見出して、その上にのしかかってみた。と思うまに激しくさめの音が沈黙をやぶつた。

「ヤッ！ これはこれは嗅煙草かぎたばこじゃ！」とブラウンが云った。

彼は一本の蠟燭を取上げて叮嚀ていねいに火を点け、元の席に帰って、それをウイスキー瓶の

口にさした。気の狂ったようにバタバタとはためく窓を犯して吹込む騒々しい夜気が長い炎をユラユラと流れ旗のように揺めかした。そしてこの城の四方に、何哩マイルとなくひろがる黒い松林が孤巖こがんを取巻く黒い海のようにごうごうと吠えているのを彼等はきいた。

「では目録を讀上げてみましょう」とクレイヴン探偵は鹿爪らしい顔をして一枚の紙を取上げた。「もつとも目録とは云いながら、実物はすべて城中のあちこちに変な風にチラバツておつたものを一ひとところ所へ集めたものではあるですが。師父さんも城内の裝飾が大部分引はがされたり、もぎ取られたりした歴々たる形跡のあるのを既に御覽の事とは思いますが、ここにただ一部屋か二部屋、何者かが住んでおつたものと見えて、——それがあの下男のゴーでないことは確かです——粗末ではあるがしかし小綺麗に整頓した室へやがあるので。では讀上げましょう——

第一項 おびたゞしい宝ほうせき石の山。九分九厘まではダイヤモンド。しかも皆貴金属より拔取られあるものにして金属は見えず。もちろんこのオージルビー家とて家族者かぞくしやの身に帯びし宝石は無数にありたるならんも、今ここに記す宝石類は皆極めて一般の場合特別な裝飾品に象やじうがん眼がんさるゝ種類の品ならざるはなし、オージルビーの家族はそれ等の宝石類を拔取りて、あたかも銅貨の如く常にポケット内に弄びしものにはあらざるか。

第二項 剥出しなる嗅煙草のおびたゞしき山。煙草入にも入れてなく、囊にも入れてなくして、暖炉ストーブ枠の上、食器棚の上、ピアノの上等至る所に一塊ひとかたまりづゝにして載せてある。その様あたかも老伯がポケット内にこれをさぐり、あるひは容器の蓋を開くの懶ものうきに絶えずとしてしかせしならんが如く見ゆ。

第三項 屋内のここかしこに不思議なる金属の細片の小さき山。あるものはぜんまいの如く、あるものは精微なる齒車の形せり。これ等皆あたかも機械仕掛の玩具中より取外せしものゝ如し。

第四項 蠟燭二十五本。しかも燭台らしきもの一もなきを以てこれ等は空瓶の口にでも差して使用せざるべからず。

「さて、師父さん、あなたにお願いしておきたいのは奇々妙々なる事実が我々の予想以上にじやという点に御注目下さらんことです。もつとも謎の中心問題に関しては我々にも意見はあります、すなわち我々は一見して故伯爵には何か故障のようなものがあつたんだなどということにすぐさとしに覺りました。吾々は、彼がここに生きているかどうか、またここに死んでいるかどうか、彼を埋葬したというあの赤毛の異形いぎような男が彼の死去と何等かの關係があるかどうかを知らうとしてここへ参つた訳です。そこで仮にこれ等の仮定の中うち、事實は

最も悲しむべき事態にあつたものとして、いわば非常に物凄い、芝居がかりの筋でも想像するとしたならどうでしょうか。すなわちあの下男が主人を実際に殺害したものと仮定するなり、主人が実際に死んでおらんと仮定するなり、主人が下男に化けているんだと仮定するなり、もしくは下男が主人の身代りに生埋めにされたものと仮定するなり、とにかくよろしく想像をめぐらしてみるとします。しかも結果はどうでしょう、蠟燭あつて燭台のない理由や、相当の家柄に生れた分別ある紳士が常習的に嗅煙草をピアノの上などに散らしておくなどという理由の説明はどうあつてもつかんのです。吾々は話の中心だけは想像が出来ました、疑問はむしろ外縁にあるのです。いかに想像力をたくましゅうしても、人間の心には嗅煙草とダイヤモンドと蠟燭とバラバラの齒車やぜんまいとの關係を推測する事は不可能とはいわなくてはなりません」

「むしろはその關係はよう解げせると思うがなあ」と坊さんが云つた。「このグレンジル伯なる者は仏蘭西革命フランスに対して熱狂的に反対な王党であつた。彼はやはり昔風の王制の讚美者であつた。そこでルイ王朝の家庭生活を文字通りに今の社会に再現させようと試みた。彼が嗅煙草を持つとつたのは嗅煙草なるものが彼の御氣に入りである拾八世紀の奢侈品しゃしひんであつたからじゃ。蠟燭は拾八世紀の燈明であつたからじゃ、銅鉄製の豆機械というのは、

ルイ十六世の錠前道楽を象つたものじや。ダイヤモンドは有名なマリー・アントワネット（ルイ拾六世紀の皇后）のダイヤモンド頸飾じや」

相手の二人は眼を丸くしてブラウンの顔を見入った。

「オー何と云う奇想天外的な推理であろう」とフランボーが叫んだ。「しかし師父あなたは本当にそうと信じておられるのですか」

「いやそうでない事をわしはきつく信じるよ」と師父ブラウンが答えた。「だがあなたがたは何人といえども嗅煙草とダイヤモンドとぜんまいと蠟燭との關係をよう見破らんとのみ云われるがわしはその關係を一つ出放題に鮮明がしてみたいんでな。事實の真相は、わしはきつと信じるが、もそつと深い所に横たわっているんじゃない」彼はふと言葉をきらして小塔に咽び泣く風音に耳を澄まして、それから更に続けた。

「故グレンジール伯は盜賊であつた。命知らずの強盜として裏面に暗い生活を送つておつた。彼は蠟燭を短く切つて、小さな角灯の中に入れて歩いた故に燭台の必要がなかつた。嗅煙草は、最も強暴な仏蘭西の犯罪者が胡椒を使用した様にこれを使用した。というのは、これを引つかんで捕吏もしくは追跡者の面にいきおいよくパツと投げつけるためにじや。最後に、ダイヤモンドと鋼鉄の齒車であるが、これは不思議にも一体をなすものと見える。

これで何もかもあなた達はがてんするであろうが、ダイヤモンドと小さな鋼鉄の歯車は盗賊には限らない。どんな人でも硝子を切る時にこれがなくては出来ないという二つの道具であるのじゃ」

松の樹の折枝が嵐にもまれて、二人の背後の窓まどかまち 框かまちをバサバサバサとたたいた。強盗の向うを張ったわけでもあるまいに、しかし二人は振向もせず熱心に師父ブラウンの顔を見つめていた。

「ダイヤモンドと小さな歯車、フン」

とクレイヴン探偵が思案に耽ふけるような面持でしきりに繰返した。「しかしそれだけで本当に真の説明になるでしょうか」

「いやわしもそれが真の説明だとは思わんのじゃ」

坊さんはけろりとした顔で「じゃがあなたがたはこの四者の関係を見破る者は誰もないとばかり云われる。もちろん、本当の筋はもつと平凡に相違ない。そうかな、グレンジャーは屋敷内で宝石を発見した。もしくは発見したと考えた。というはこうじゃ。何者かがこれ等のバラの宝石を主人に出した。これは城内の洞窟内で発見したものだというて、主人を欺だまそうとした。小さな歯車はダイヤモンドを彫る道具である。主人はこの山中にすむ

羊飼やら野人やらの助けを借りて手任せに掘り出そうとした。嗅煙草はスコットランド蘇格蘭の羊飼どもにはとても贅沢品じゃ。なあ、これを鼻先へついと突つけければ誰だって何ぼうでも彼等を買収する事は出来る、最後に燭台のない理由は、燭台なんかはいらないからじゃ、洞窟内なんぞを照すには裸蠟燭で結構用が足りるもんじゃが

「はあ、それだけですか」ややしばらくしてフランボーがこう訊ねた。「やれやれこれどうとう不景気な真理に到達した訳ですかね」

「いや、そうではない」とブラウンが答えた。

風が松林の遙かなる涯はての方へ、セセラ笑うが如くホーホーホーと長く後を引かせながら消え去った時師父ブラウンがポカンとした顔で言葉が続けた。

「なに、わしはあなたがたが、誰だつて嗅煙草と歯車もしくは蠟燭と宝石との関係をもつともらしく説明することはようせんと余り云わるるものでちよつともつともらしい事を云つてみたまでの事じゃ。十把一擲げの似非哲学が宇宙には似つかわしいように、グレンジル城には、十把一擲げの似非推量が似つかわしいといったような訳でな。しかし実はこの城にも実際の説明が無ければならん。時に蒐集品はもう外ほかには無いでしょうか」

クレーヴンは吹き出した。フランボーもニヤリと笑いながら立上つて、長い卓テーブル子の端

の方へのそのそと歩いて行つた。

「第五項、第六項、第七項と控えてはいるが、掘出すとかえつて蜂の巣をつついた様になります」とフランボーが答えた。「第一に鉛筆心しんが山のようにあります。これは心だけで鞘がない。それからブツキラ棒な竹の杖が一本、これは頭の金具が剥取つてあります。兇行用の道具としては役立ち得る代物だが別段犯罪らしいものもない。外ほかにはまあ古ぼけた弥撤みさの祈祷書が二、三冊と小さな旧教の画えが何枚かあります。察するにこれ等はこのオージルビー家に中世時代から伝わっているものと私は思う。が、妙にところどころ切り抜いてあつたり、顔なぞもえらい事になつているので、これは博物館へでも廻したい代物です」

外では猛烈な嵐が城をかすめて物凄い千切雲ちぎれぐもを吹飛ばした。そしてこの細長い空の中に闇を投げ込んだ。その時師父ブラウンは、その小さな本を手にとつて燦爛さんらんと光るその頁ページをしらべ始めた。やがて彼は口を開いた。闇の影はまだ立迷つていゝ。しかし彼の声はまるで生れ變つて来た様な声であつた。

「クレーヴンさん」と云つた声は十歳も若く聞えた。「あなたはあの山上の墓を発掘すべき正式の、令状をたしかに御持ちでしょうね。善は急げだ。急げばそれだけこの恐るべき事件の底も早くたたいて見られると云うものです。もしわしがあなたであつたらすぐさま

出立致しませんがね」

「これからすぐ、えエどうしてすぐでなければいけないんです」探偵は驚いて訊ねた。

「さあなぜというかと、これはなかなか重大問題ですからじゃ、嗅煙草の散らばっている事や宝石の抜き取つてある事に対しては百の理由も想像もなりうるが、この書物をこんな具合に瑕物きずものにしておつた理由はただ一つしかない。これ等の宗教画がこの通り汚され、引裂かれ、落書らくがきさえされてあるのは、子供の悪戯や新教徒の頑迷からした仕事ではない。

これはすこぶる念入りにやつた仕事です。またすこぶる不可能なやり方です。神の御名みなを金文字で大きく書いてある部分は残らず叮嚀に切取つてある。その外ほかにこの手をくつている箇所は嬰兒基キリスト督みあたの御頭ごこを飾る御光ごこうである。じゃによつてわし等はこれから直ちに令状と鋤と手斧をたずさえて山へ登つた上、棺かんを発掘しようかとこう云うんです」

「ハア、とおつしやると、どういう意味ですか」倫敦ロンドンの探偵がたたみかけるように訊いた。

「と云う意味は」と小さい坊さんの答える声は嵐の咆ほえ狂う中にもちよつと大きくなつたかと思われた。「と云う意味は宇宙の巨大なる悪魔が、今この瞬間、この城の大塔の頂上に、百の衆を集めた様にふくれ、黙示録のそのように咆哮しつつかろうやもしれないと

いうんです。この切抜事件の底にはどこやらに悪魔の魔法が潜みいると見える。とにかく秘密の鍵を開くべき一番の近道は山へ登つて墓をあばくのが一番だと想いますじゃ」

二

二人の相手は庭に出て、猛烈な夜嵐におそわれ、頭を吹飛ばされそうになるまでは、いつの間にも師父ブラウンの後についてきたのか自分でさえ気がつかないくらいであった。それにも拘らず彼らは自動機械のように坊さんの後について来たのであった。なぜならばクレーヴン探偵は自分の片手にチャンと手斧をつかんでいるのを見るし、ポケットの中には令状もはいつていたからだ。フランボーも疑問の人物ゴアの重い鋤を借り出して持つていたからだ。ブラウンは問題の小型の金製の本をしつかと携えていた。山上の墓地に達する路は曲りくねつてはいるが、遠くではない。ただ向い風が身体にあたるので骨のおれる気がした。見渡す限り、そして上の方へ登れば登るほど、松林の海で、それも今風をうけて見渡すかぎり一様に横様になびいている。その一列一体の姿勢には、それが渺茫としてただに何やら空々たる趣きがあった。ちょうど疾風がどこかの人類の棲息しな

い目的もない遊星をめぐって咆哮でもしている様に空々たる趣きがあつた。彼等は山の草深い頂上に来た。松林は頂上までは続いているので、そこはさながら禿頭のように見えた。材木と針金とで作った粗末な外柵は、これが墓地の境界だと一行に物語る様に嵐の中にピウピウと鳴っていた。しかしこの時既にクレーヴン探偵は墓の一角に立ち、フランボウは鋤の尖を地中に突き立てて倚り掛つていたが二人共に、その材木や針金並びに嵐の中にフラフラと揺れて見えた。

墓の下方には丈の高い薄気味の悪い薊が枯々とした銀灰色を呈しながらむらがつていた。一度ならず、二度ならず、嵐にあおられた薊の種子がブウと音を立てながらクレーヴン探偵の体を掠めて弾け飛んだが、そのたびごとに探偵は想わずそれをよける様な腰付になりながらピヨコリと飛上つていた。

フランボウはざわめく叢の上から鋤の刃をしめつぽい粘土の中へザツクリと刺込んだが、思わずその手を引いて棒杭にでもよりかかるようにその柄によりかかった。

「どんだん関わらずやりなさい」と坊さんが落着いた声で云つた。「わし等はただ真理を発見しようとして試みるだけじゃ、何を恐れる事があるんじや」

「いやその真理の発見が実は少々、むずかしい」とフランボウが苦笑いをしながら相槌を

うった。クレーヴン探偵は突然赤ん坊の歓ぶような大きな声、
 話^{はなし}声^{しごえ}と歓声とを一しよ
 にしたような声でこういった。

「實際何だつて彼はこんな風に身体^{からだ}をかくそうとしたもんだろう、何か恐ろしい事でもあ
 るんかしら。あの男は癩病患者でもあったのでしようか」

「いやそれにしんにゆうをかけたようなものさ」とフランボーが云った。

「へえそれにしんにゆうをかけたものというと、はあて」

「なに実は私にも見当がつかないんだ」

かくてフランボーはだんまりのまま^{おそ}惧る^{おそ}何分かの間掘りつづけたが、やがて覺束な
 げな声でこういった。

「やれやれ死体の原形がくずれていない事を神に祈る」

「それはな、あなたこの紙面だとして同じことじゃ。この紙面を見てもわし等は氣絶もせん
 でとにかく生延びては来たもんな」師父ブラウンが静かにまた悲しそうにこう云った。

フランボーは盲目滅法^{めくらめつぽう}に掘った。が、嵐は今までの煙のように山々にまつわりついて
 いた息苦しいような灰色雲を既に払いつくして、彼が荒木造りの棺^{かん}を根こそぎ掘出して、
 芝生の上に引っぱり出させた頃には星影さびしい夕空をからりとぞかせていた。クレー

ヴンは手斧を握りしめて前へ進みよつた。薊あざみの頭が彼にさわつた。またもやはつとした彼は思わずたじたじとなつた。がたちまち氣を取直して、フランボーに負けぬ力を揮ふるいながら、手斧を棺かんへ滅多打ちに打ちこんだ。遂に蓋が飛散つた。内部にあるほどのものはすべて灰色の星明りの中に異様な薄光りを放つていた。

「骨だ」とクレーヴンが云つたが、彼は次に、「人骨だ」と言い足した。何なにか思いがけない物を発見したように思わず大声を上げた。

「それで君、それはそっくりしているかね」とフランボーが妙に沈んだ声で訊ねた。

「さあ、そっくりしている様だが、まあ待ちなさい」探偵は棺かんの中に横わる黒ずんだ腐れ骸骨がいこつの上に乗しかかるようにして見ながら噎しわがれ声で云つた。たちまちまた彼は、「これは不思議だ、骸骨に首がない」と叫んだ。

クレーヴンもフランボーもしばらくは棒立に立ちすくんでいたが、この時初めて、一大事といわぬばかりに、びっくりして飛上がつた。

「何、首がない、へー、首がない」坊さんは元より欠けているものがあるにしても、まさか首ではないだろうと思つていたのに、と云うような意外な調子でこう繰り返した。

たちまち一同の頭には、クレンジール城に首無児くびなしこの生れた、もしくは、首無少年が城

中に人目を避けている。あるいはまた、首無の大人が城中の昔造りの広間や華麗な庭園内を潤歩しつつある馬鹿らしい光景がパノラマのように過ぎ去った。しかし肝心の眼の前の問題については何の名案も頭には浮んで来ず、また首無の理由があるのやらないのやらさえ考える事が出来なかつた。一同はまったくポカン、とした面持で疲れはてた馬か何かの様に、嵐の音や松林のざわめきに、ただ聞きいるばかりであつた。

考えるにも考える事が出来なかつた。とその時、静かにブラウンが話しだした。

「ここに三人の首無男が発掘された墓をかこんで立つておりますな」とブラウンが云つた。青くなつた倫敦ロンドン探偵は何か物を云おうとして田舎者のように口をアングリさせたままであつたが風は遠慮無くピンピンと空をつんぎくように叫んだ。やがて彼は自分の手に持つ手斧を、自分のものではないようにながめてはたと落した。

「師父、師父」とフランボーが取つておきの嬰あかんぼ児じみたしかし重苦しげな声を叫び出した。「この際吾々はどうすればよいのでしょうか」

するとこれに応じてブラウンは小銃弾が出て行く時のシューツというような怪速度を以て、「眠る事じゃ」と叫んだ。「眠る事じゃ、わし等は路のどんづまりまで来た。眠るとはどう云う事かな。あなたは知っているかな、眠る所の凡ての人は神を信じる人であると

いうことを、故に眠りは聖礼である。なぜならば眠りは信仰の行いであるからじゃ、吾等の糧である。でわし等は何かしら聖礼を要する。それも自然の聖礼だが、何やら人間の上に滅多には降りて来んものがわし等の上に下つて来る。おそらくそれは人間の上に下る事の出来る最悪のものでもあろうか？」するとクレーヴン探偵の唇が「一体それはどういう意味なんですか」と訊くために上下から寄り添った。

坊さんは城の方に顔を廻しながら答えた。

「わし等は真理を発見はしたのじゃ。がその真理は意味を吾々に語らんのだ」

こういつて彼は彼としてはごく珍らしい、馬が無鉄砲に飛跳ねるような足取りをしながら、二人の前に立つて山を降った。そして城へ到着するかしらないかに彼は犬のように無雑作に身体を眠りにまかせた。

三

妙に勿体をつけて睡眠を讚美したのに拘らず師父ブラウンは唾者のような作男ゴーをのぞいた外誰よりも一番早く起出でた。そして大きなパイプを吸いながら、その黒人が菜園

で無言に働いているのをジッと見守っている彼の姿が見られた。夜の明け放れる頃には夜来の嵐は篠しのつくような驟しゅう雨を名残として鳴りをひそめ、ケロリとしたようにすがすがしい朝が一ぱいに訪れていた。作男は坊さんと何か話をしていたような素振りさえ見えたが、官私二人の探偵姿を見ると、俄にプリプリしたように鋤を畝せの中に突込んだ。そして朝飯の事について何やらほざきながら、キャベツ菜の作列さくに添そって台所の方へ姿を掻き消してしまった。

「あの男は見上げた男ですぞ」ブラウンが口をきいた。「あの男は馬鈴薯をたまげるほど掘るのでな。ただし」と彼は妙に落着いた情深い心になりながら「あの男には欠点もあるのです。いやお互に欠点のないものがどこにあるうかな。すなわち、あの男は畑の畝せを真ま直つすぐに掘らん事じゃ。まあ諸君ここを見なさるがいい」

彼はこういつて突然ある一点を踏みつけてみせた。「時に私にはどうもあの馬鈴薯が怪しいと思われるのじゃ」

「へエなぜです」クレーヴン探偵は、小男こおとこの坊さんが新趣向を提出したのを面白がりながら訊ねてみた。

「どうもあの馬鈴薯が怪しいと云うのは、第一作男のゴ―自身を怪しいと想っているから

じやなあ、ゴーは外の箇所はきつと掘るが、どうもここだけは変な掘りかたをしている。大方この下には大へん立派な馬鈴薯でも埋まっている事じやろう」

フランボーは鋤を引抜いて、いきなりザクリとその地点に突込んだ。彼は土塊の下に馬鈴薯とは見えずしてむしろ醜怪な円屋根形の頭をもった、蕈のような形をした変なものを掘り出した。がそれは冷たいコチリという音がして鋤の尖にぶつかって手毬のようにコロコロと転がりさま一同の方へ歯をむき出した。

「グレンジール伯爵様じや」とブラウンが悲しげに云った。そして悄然として髑髏を見下ろした。それからしばし彼は黙祷するものの如くであったが、やがてフランボーの手から鋤をとって「さあこうして元の通りに土をかけねばならん」と云いながら頭蓋骨を土に深く押やった。やがて彼は小さな身体と大きな頭を地中に棒のように立っている鋤の大きな把手にもたれさせた。その眼はからっぽで額には幾条も鬚がただしくならんでおつた。

「そうじや、もしこの最後の怪異の意味さえ合点が出来るものならなあ」

彼はこう独語をつぶやきながら、鋤頭によりかかったまま、教会で祈禱をする時のように両手に額を埋めた。

空の雲々が銀碧色にかがやき出した。小鳥等は玩具のような庭の木々の中でペチャクチャとさえずり合った。その音があまりにやかましいので、まるで木自身が掛合嘶をやっているかのようなようであつたが、三人の人物はじつと無言の態であつた。

「やれやれ、もうこれで御放免が願いたいもんだ」とフランボーがたまらなくなつてガンガン呶鳴った。

「この頭とこの世界とはどうもシツクリ合はんもうさらばだ。やれ艱煙草だの、やれ汚された祈祷だの、やれなんだのだつて」

ブラウンは額に八の字を寄せ、いつもに似合わぬ短気短気になつて鋤の柄をバタバタとたたいた。

「とつととやれ」と彼が叫んだ「何もかも火を見るように明白なんだ。嗅煙草も歯車も何にもかもなんだ。今朝眼をさますと同時に解つたんじや、そうしてわしは外へ出て来て作男のゴートも話したんじや。どうして、あの男は阿呆で聾に見せかけているが、なかなか聾や馬鹿どころではない。ところで諸君あの条項書はあのあの通りでキチンと筋が通つてゐる。わしは破れた。

弥撤書についてもカン違いをしていたが、あれはあれで穩かなもんじや。しかしこの最

後の件ですぞ。墓をあばいて人物の頭を盗みおろうというここに確かに穩かならんもんだあると見た。確かにここにばかりは魔法があるようだ。どうもこればかりは嗅煙草や蠟燭というたようなわけのない話とは筋が違ふようじゃ」

こういつて彼はコツコツ歩きまわりながら不機嫌そうに煙草をすった。

「皆の衆」とフランボーがわざと勿体らしく云った。「諸君俺に注意するがよい、俺が昔は犯罪家だった事を忘れぬがよい。あの時分は実に面白かった。俺は自分でズンズン話の筋道を組立ててズンズン想いのままに実行したもんだ。その俺だ、こんなものらしく探偵事件は仏蘭西フランスの俺に堪え得る事ではない。俺はオギヤアと云つて、この世に生れて以来、善悪ともに片端かたっぱしから手ツ取り早くかたづけけたものだ。決闘の約束をするにしても翌朝は必ずチャンバラやったもんだ」

「勘定書はいつでも即金でガチャガチャと支払ったもんだ。齒医者へ行くんだつて約束日を延ばしたりなんかはせん」

と突然師父ブラウンのパイプが口からすり落ちて花崗岩みかげいしの廊下の上で三つに割れた。彼は阿呆の様に眼球をクルクル廻転させた。

「オー神よ、何として私は大根だったろう」

こう叫びながら彼は泥酔漢でいすいかんが故なく笑う様にワハワハと笑い出した。

「歯医者歯医者」彼はフランボの言葉を繰返した。「アアわしは六時間も精神的に奈落の底に沈みおつた。これと云うのも皆今の歯医者と云う事に気がつかないばかりだった。」「オー何という簡単なそして美しい、そして平和にみちた考えじやろう、諸君よ、わし等は一夜を地獄に過した。しかし今は太陽の輝き、小鳥はうたい、そうして歯医者の輝かしい姿が世界を慰撫していられるを見られい」

「ア、私にもその意味がわかるでしょうか、もし地獄の拷問を受ける気で辛抱強くその意味を考えると」とフランボが大股に前方にのり出して叫んだ。

師父ブラウンは今やわずかに日の輝いた芝生の上に踊り出したで歡びを押えかねる様な顔付をした。彼は氣の毒そうに子供の様に叫んだ。

「オーわしは何となしに嬉しくなつて来る。だが今までわしがどのくらい苦しんだか、あなたがたに見せてやりたいくらいだ。しかし今わしはこの事件には深い犯罪というたよなものが全然ない事を知る事が出来た。だが少し氣狂きちがいじみたものがあるばかりじゃ」
 こういながら彼はもう一度大きく廻つて、二人の相手の方に勿体らしく顔を向けた。

「諸君この事件は何も犯罪の物語りではないので」と彼が始めた。「これはむしろ正直の

物語というべきである。吾々はこの地上に於ける自分の分わけ前まえ以上のものを決して取らんところの一個の人間を論ずるのじや。だからこの種の宗教族であるところの野蛮な生きた論理の研究でありますぞ。

グレンジール家を諷して歌った。『生木にや青い血、オージルビーにや金の血』という名高い鄙歌ひかはあれは修辞的の意味ばかりでなく文字通りの意味があるのじや。すなわち、グレンジール家は単に富を集めたばかりでは無く文字通りに黄金を集めたものでじや」

「彼等は黄金製の装飾品や器具を山のように集めたんじや。彼等は実にけちん棒でその果は狂人のようになつたんじや。わし等が城内で発見した、あらゆるものをこの事実じじつに照らしてみる事が出来るんじや。それはダイヤモンドの指輪があつても金の指輪がない。

「罌煙草はあれども、金の煙草入がない。散歩杖はあるけど金の頭飾りがない。ぜんまいや歯車はあるが金側時計きんがわがない。そしてこれは全く気狂いのような話しじやが、あの古い弥撒書みさにある基督像キリストの後光や神の御名おんなでさえも、やはりあれが純金であつたものじやによつてこれもまた抜き取られてしまつたんじや。庭は輝くが如くに見え、草は光をまし行く陽光うらみの中にいつそう楽しげに見えたのじや」

この気狂きちがひのような真理を話した時フランボーは巻煙草に火を点けた。

「そして取去られたんじや」と師父ブラウンが語をついだ。

「取去られたんであつて、盗み去られたんではない。いつかな、盗賊の仕業なら、こうした謎を残しては行かない、盗賊は純金製の鯢煙草函ぼこを盗めば中味の煙草も何も皆みんな持つて行く。金の鉛筆鞘にしても中の心しんも何も皆な持つて行く」

「そこで吾々は一個の奇妙な良心を、確かに良心に相違ない、持つ男を論じなくてはならんのだ。わしはその狂人のような律儀者を今朝向うの野菜畑で発見した。そして一語一什の物語りを聴いたのだ」

「故アーキポールド・オージルビー伯爵はかつてこのグレンジール城に生れた人の中では珍らしい美男であつた。しかし彼の俊厳な徳は遂に彼を人間嫌いに變じた。彼はこの城の先祖の不正直なことを知つて快わうわう々々として楽しまなかつた、それから幾分彼は一般に人間というものは不正直なものであると思ふようになった。とりわけ彼は慈善とか施財とかいうものを信ずることが出来ないようになった。そしてもし正直に自分に与えられただけの権利以上に決して貪ることを知らぬ人間がこの世にあるなら、その者にグレンジール城内の黄金を残らず譲つてやろうと心に誓つた。人間に対してこの挑戦を宣言した後のち、彼はしかしそうした人間が何としてこの世にあらうものかと考えながら、城内ふかく人目を避け

て閉籠もつていた。しかしながらある日、聾で一見白痴のような一人の若者が遠方の村から、一通の電報を彼のところへ持つて来た、伯爵は苦笑いをしながら彼に新しんちゆう鑄ちゆうの一錢銅貨を一枚与えた。少なくともその時は銅貨を与えたのだと思つていた、やがて財布をあけて貨幣をしらべてみると、新鑄銅貨はそのままあつて十円金貨が一枚無くなつてゐるのを発見した。この偶然の出来事は伯爵の皮肉な頭に対して好ましい光景を与えた。いずれにしても、その若者は人間らしく貪慾の炎を燃やすであろう。すなわち貨幣盜財として姿をくまますか、褒美ほしさに返しに来るか。その夜の真夜中にグレンジール伯爵は寝込みをたたき起された——彼はたつた一人で住んでおつたんじや——そして最前の白痴のために扉ドアをあけさせられた。白痴は果して持つて来た、ただし最前の金貨ではのうて、九円と九十九錢、キチンと釣錢を持つて来おつた。

「そこで、この馬鹿正直行為を見て、狂的な伯爵の頭は火のように燃えた。彼は自分が永い間一人の正直な人間を求めた今様デイオゲネスで、遂にその一人を求め得たのだというた。彼は新たに一枚の遺言書を書いた、それはわしも見せてもろうたが。彼はその律儀な若者を巨大な人気のないこの城中に引取つて、無言の下男として、また——奇妙な方法で——自分の後継者として訓育した。そこで、この奇妙な男が伯爵の言げんをいかほど理解した

としても、とにかく次の二つの訓言^{くんごん}だけは絶対に理解した。第一に「正直」という文字が万能であること、第二に彼自身がグレンジールの「富」の相続者にされたのであるということ。そこまでは簡単である。男は家中のありとあらゆる黄金を剥取りはじめたんじや。しかしじやその代りに黄金にあらざるものは何一つとして手を触れなんだ。嗅煙草は無論のことである。彼は古い美しい本さえも引張出して中から金の類^{るい}を切取った。しかしそれで他の部分には正直に手をつけんと思つておつたようなわけですじや

「これだけの事実をわしは知つた、しかしわしには髑髏^{どくろ}の一件が了解出来ん。馬鈴薯畑から人間の首が飛出したのを見ては心中すこぶる安からざるものがあつた。わしは困り抜いた——そこへフランボー君、君が『齒医者』という一言を提供してくれたんだ。

「したがまあよいわ、金齒さえ抜取つてしまえば、髑髏は元の墓の中へ納めるじやろうからな」

そして、實際、フランボーがその朝、例の小山を通りかかった時、彼は例の不思議な人物、正直一轍^{けちんぼ}の吝嗇漢^{けが}が一度汚した墓をまた掘返しつつあるのを見かけたのであつた、格子^こ子縞^{うしじま}のスコツチラシヤを頸のまわりで山風^{やまかせ}にひるがえしながら、そしてジミな絹帽を頭上にいただいて。

青空文庫情報

底本：「世界探偵小説全集 第九卷 ブラウン奇譚」平凡社

1930（昭和5）年3月10日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「或↓あ・あるい 恰も↓あたかも 貴方↓あなた 雖も↓いえども 如何↓いか 何れ↓いづれ 一層↓いつそう 於て↓おいて 恐らく↓おそらく 斯↓か・こ 反つて↓かえつて 彼処↓かしこ 曾て↓かつて 位↓くらい 此↓こ・この 極く↓ごく 此処・此所・茲↓ここ 是・之↓こ・これ 左様↓さう 然・而↓しか 而かし↓しかし 暫し↓しばし 暫く↓しばらく 直様↓すぐさま 頗る↓すごぶる 凡て↓すべて 直ぐ↓すぐ 即ち↓すなわち 其↓そ・その・それ 而↓そ 其処↓そこ 沢山↓たくさん 唯↓ただ 忽ち↓たちまち 度事↓たびごと 給↓たま 為↓ため 丁度↓ちょうど 一寸↓ちよつと て居↓てい・てお て頂↓てただ て置↓てお て見↓てみ 何↓ど・どう

何処↓どこ 兎に角↓とにかく 取りわけ↓とりわけ 何故↓なぜ 成程↓なるほど
筈↓はず 程↓ほど 迄↓まで 又↓また 寧ろ↓むしろ 若↓も・もし 知れない↓し
れない 勿論↓もちろん 尤も↓もつとも 貫↓もら 矢張↓やは・やはり 俺↓わし
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくつ
ています。

※底本中の「グレンジル」「グレンジール」、あるいは「フランボー」「フランボウ」、
「燈」「灯」の混在はそのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（加藤祐介）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年6月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ
ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

作男・ゴーの名誉

THE HONOUR OF ISRAEL GOW

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 チェスタートン Chesterton

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>